

◆2021年1月第2週のメッセージ

■日時：2021年1月10日（日）

■場所：立川教会

■説教題：「『ぶどう園と農夫』のたとえ」

■聖書：新約マルコによる福音書12：1-27（新p85）

■讃美歌：17「聖なる主の美しさと」・566「むくいを望まで」

お早うございます。

皆様、お元気でいらっしゃいますか。

一昨日、東京など1都3県に緊急事態宣言が発令されました。緊急事態宣言は、昨年4月に続いて2度目のことです。しかし、前回と違う点があります。

宣言が出された1月8日（金）の前日の国内感染者数は7,500人を超えました。この7,500人と言う数字は、昨年4月7日に第1回目が出され時の377人に比べ、20倍の数字です。このため、すでに医療崩壊が起きて始めています。医療崩壊と言うのは、コロナに限らず、病人など医療を必要とする人に対して十分な医療行為が出来なくなることです。今、私たちは、最も深刻な感染爆発段階の指標となるステージ4にいます。このステージ4から脱却し、ステージ3から、さらに2へ、如何に感染を抑えることが出来るかが問われています。

宣言解除の目安として政府が示したのは、一日あたりの感染者数が500人を下回ることでした。このような事態のもとにあることを自覚しつつ、不要不急の外出を控えるなど私たちに出来ることを考えながら生活し、事柄の推移を見つめて行きたいと思います。又、この2度目の宣言によって、生活面や経済面で一層の困難に追いやられて行く人々、及びコロナ

との戦いの第一線に立ち続けている医療従事者や罹患した方々のことをも常に心に覚え、祈り続けたいと思います。

それでは、マルコによる福音書、第12章に入ります。

今日与えられた御言葉は、1節から27節で、ここでは3つの話しが記されています。

まず、前半の1節から12節を見てください。

1節を読みます。

1：イエスは、たとえで彼らに話し始められた。「ある人がぶどう園を作り、垣を巡らし、搾り場を掘り、見張りのやぐらを立て、これを農夫たちに貸して旅に出た。

ある人、それは神様です。

ぶどう園とはイスラエルを意味し、農夫はイスラエルを導く人々、即ちイスラエルの支配階級である祭司長、律法学者、長老たちを指しています。

神様は、「垣を巡らし、搾り場を掘り、見張りのやぐらを立て」、即ち、収穫を得るにこれ以上ないほどにぶどう畑を整え、祭司長など支配階級の人々にイスラエルを任せて旅に出たのです。2節です。

2：収穫の時になったので、ぶどう園の収穫を受け取るために、僕を農夫たちのところへ送った。

ぶどう園がいよいよ豊かな実を結び、収穫の時が訪れました。地主であるぶどう園の主人は、約束の収穫の分け前を得るため、つまり小作人たちから貸した土地の小作料を得るため、僕を農夫たちのもとへ送ります。主人の僕、それは神様から遣わされた預言者を指しています。3節です。

3：だが、農夫たちは、この僕を捕まえて袋だたきにし、何も持たせないで帰した。

農夫たちは、主人から遣わされた僕に対し、ひどい仕打ちをして追い返しました。

しかし主人は、それにもかかわらず、又別の僕を送ります。4節です。

4：そこでまた、他の僕を送ったが、農夫たちはその頭を殴り、侮辱した。

農夫たちは、この僕も又侮辱して追い返します。そして5節です。

5：更に、もう一人を送ったが、今度は殺した。そのほかに多くの僕を送ったが、ある者はなぐられ、ある者は殺された。

僕に対し、農夫たちはことごとく酷い仕打ちをし、殺される者まで出たにもかかわらず、主人は耐え続けました。今度こそ、農夫たちは、それまでの非を悔い改め、正当な要求である小作料を払ってくれるだろうと期待したからです。そして、最後の手段として、6節から8節です。

6：まだ一人、愛する息子がいた。『わたしの息子なら敬ってくれるだろう』と言って、最後に息子を送った。

7：農夫たちは話し合った。『これは跡取りだ。さあ、殺してしまおう。そうすれば、相続財産は我々のものになる。』

8：そして、息子を捕まえて殺し、ぶどう園の外にほうり出してしまった。

息子とは、主人から全権を委任された者でした。

農夫たちは、この息子を殺し、主人も死ねば、このぶどう園の所有者はいなくなり、当時の社会的慣習として耕作をしている自分たちの物に出来ると考えたのです。そして、息子を殺し、ぶどう園の外に投げ捨てました。

このような話しを、先に問答を行っていた祭司長、律法学者、長老らに向かって語った後、

イエス様はさらに言葉を続けました。9節から11節です。

9：さて、このぶどう園の主人は、どうするだろうか。戻って来て農夫たちを殺し、ぶどう園をほかの人たちに与えるにちがいない。

10：聖書にこう書いてあるのを読んだことがないのか。

『家を建てる者の捨てた石、

これが隅の親石となった。

11：これは、主がなさったことで、

わたしたちの目には不思議に見える。』」

自分の息子を殺されたことを知った主人は、戻って来て、農夫たちを殺し、このぶどう園をほかの人たちに与えるのだと言われます。つまり、神様は、農夫たち、即ちこの国の指導者である祭司長、律法学者、長老らを裁いて、ぶどう園を彼らから取り上げ、他の人たち、すなわちユダヤ民族以外の異邦の人々へ与えると言われました。

同時に、詩編 118 編 22-23 節の言葉を引用して、主人の愛する息子を「家を建てる者の捨てた石」にたとえ、捨てられた石こそ、「隅の親石」、即ち、建設にあたっての土台となる最も重要な石として神様が用いられることを告げて行きます。この建築とは、来るべき神の国を意味し、隅の親石となる捨てられた石とはご自分のことでした。

そして、12 節。

12：彼らは、イエスが自分たちに当てつけてこのたとえを話されると気づいたので、イエスを捕らえようとしたが、群衆を恐れた。それで、イエスをその場に残留して立ち去った。

イエス様が語られた例えが、自分たちに向けたものであることを知った民の指導者たちは、イエス様を捕らえようとしてしました。しかし、イエス様の言葉を喜んで聞いている群衆の反発を恐れ、立ち去ります。

その後、今度は別の敵対者が現れ、イエス様を罠にかけようとして企みます。それは、13 節から 17 節でした。

初めに 13 節を読みます。

13：さて、人々は、イエスの言葉じりをとらえて陥れようとして、ファリサイ派やヘロデ派の人を数人イエスのところに遣わした。

ファリサイ派とヘロデ派、彼らは、実はローマ皇帝への税金、即ち人頭税を払うに際して考え方が違っていました。ファリサイ派は、律法に厳格である故に、貨幣である 1 デナリオン銀貨に彫られていた皇帝の肖像を偶像と見なし、この偶像が彫られている銀貨を用いての納税に抵抗を覚えていました。一方、ヘロデ派は、皇帝に対して従順であり、納税を当然の義務としていたのです。このような税に対する考え方の相違があったにもかかわらず、イエス様を罠に陥れるためにはお互いの違いなど問題にせず、一緒になってやってきました。14 節から 17 節です。

14：彼らは来て、イエスに言った。「先生、わたしたちは、あなたが真実な方で、だれをもはばからない方であることを知っています。人々を分け隔てせず、真理に基づいて神の道を教えておられるからです。ところで、皇帝に税金を納めるのは、律法に適っているでしょうか、適っていないでしょうか。納めるべきでしょうか、納めてはならないのでしょうか。」

15：イエスは、彼らの下心を見抜いて言われた。「なぜ、わたしを試そうとするのか。デナリオン銀貨を持って来て見せなさい。」

16：彼らがそれを持って来ると、イエスは、「これはだれの肖像と銘か」と言われた。彼らが、「皇帝のものです」と言うと、

17：イエスは言われた。「皇帝のものは皇帝に、神のものは神に返しなさい。」彼らは、イエスの答えに驚き入った。

この17節の「驚き入った」という言葉は、敵対者たちがイエス様の答えに驚愕した、心の底から驚いたと言う強い言葉です。

それではなぜ、罠にかけようとしていた彼らが驚き入ったのでしょうか。

彼らが仕掛けた罠は二つありました。そして、どちらに転んでも、イエス様を確実に陥れられるとの確信がありました。

罠の一つです。もしイエス様が、ローマ皇帝に税金を納めるのは「律法に適っている」

「納めるべき」だと言えば、偶像礼拝に厳格なファリサイ派の人々や、パリサイ派以上に急進的な熱心党の人々から激しく攻撃され、又、ローマ帝国の支配に否定的な民衆の離反を招きます。その一方で、税金を皇帝に「納めてはいけない」と言えば、皇帝に対して反旗を翻す、謀反を企てる者として告発されることは明らかでした。

どちらを答えても、イエス様自身の立場は危うくなり、ある意味では崖っぷちに立たされた状態に置かれたのです。

しかし、イエス様の答えは誰の思いも寄らぬものでした。税金を納めるか否かと言う世俗的な問いを、神様への信仰、心と言う、次元の違う世界へと置き換えたからです。

「もし、自分の所有する銀貨が、皇帝から与えられたと考えるなら、本来皇帝のものであるのだから皇帝に返し、この銀貨が神様から与えられたと考えるなら、本来神様のものであるのだから神様に返しなさい」と。

さらに、問答は続きます。

今度は、サドカイ派の人々からの問いかけでした。

そして、これは、私たちにとっても大切な復活に関わることです。

サドカイ派とは、エルサレム神殿を中心とする祭司的、貴族的階級の人々で、イスラエルの政治を司る最高執行機関であるサンヘドリン（最高法院）の多数を占めている人々です。

彼らは、復活を信じていませんでした。

18 節から 23 節です。

18：復活はないと言っているサドカイ派の人々が、イエスのところに来て尋ねた。

19：「先生、モーセはわたしたちのために書いています。『ある人の兄が死に、妻を後に残して子がない場合、その弟は兄嫁と結婚して、兄の跡継ぎをもうけねばならない』と。

20：ところで、7人の兄弟がいました。長男が妻を迎えましたが、跡継ぎを残さないで死にました。

21：次男がその女を妻にしましたが、跡継ぎを残さないで死に、3男も同様でした。

22：こうして、7人とも跡継ぎを残しませんでした。最後にその女も死にました。

23：復活の時、彼らが復活すると、その女はだれの妻になるのでしょうか。7人ともその女を妻にしたのです。」

ここで語られている内容は、旧約聖書の申命記第 25 章 5 節 6 節 (p319) にあるレビレート婚 (レビラト婚) のことです。つまり、ここには、兄弟の一人がその妻を残して死んだ時、

他の兄弟が残された妻を娶り、先に死んだ兄弟の跡継ぎをもうけねばならないと記されていました。そして当時、復活の後に、この妻は誰の妻であるかと言うことが問題となっていました。

ところで、復活を信じていないサドカイ派の人々が、なぜイエス様に復活の問題を持ち出したのでしょうか。それは、復活を信じている人々の間でも議論となっていたこのレビレート婚を持ち出してイエス様に議論を吹きかけ、復活など有り得ないと言う自分たちの主張の正しさを明らかにしようとしたからです。

24 節以下のイエス様の答えで、私たちが注目したいのは、24 節と 27 節で繰り返し言われているイエス様の言葉です。

24 節、「あなたたちは・・・思い違いをしている」。

27 節、「あなたたちは大変な思い違いをしている」。

そして、その思い違いの根拠としてイエス様が語られたのが、「あなたたちは聖書も神の力も知らない」と言う言葉でした。

24 節から 27 節を読みます。

24：イエスは言われた。「あなたたちは聖書も神の力も知らないから、そんな思い違いをしているのではないか。」

25：死者の中から復活するときには、めとることも嫁ぐこともなく、天使のようになるのだ。

26：死者が復活することについては、モーセの書の『柴』の箇所、神がモーセにどう言われたか、読んだことがないのか。『わたしはアブラハムの神、ヤコブの神、イサクの神である』とあるではないか。

27：神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神なのだ。あなたたちは大変な思い違いをしている。」

25節の「復活するときには・・・天使のようになる」とは、どう言うことでしょうか？

それは、復活して神の国に生きる時、私たちがどのような体となるのかは、「天使」、つまり神様が私たち一人ひとりに与えられる神の国に相応しい体となることです。それが具体的にどのような容態になるのかは、神の主権の側の出来事であり、私たちが知ることは出来ません。

しかし、確かなことがあります。

復活とは、ある方の言葉を借りれば、再びこの「地上の生活を取り戻す」（佐藤司郎）ことではなく、「全く新しい存在の仕方」（佐藤司郎）で神の国に生きることです。

神様は、「死んだ者の神ではなく、生きている者の神」（27節）です。

それ故にこそ、神様は、私たちを、死から命へと甦らせませす。

その時、私たちは、朽ちる体から朽ちない体へと変えられるのです。

「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる」（ヨハネによる福音書第11章25節 p189）とのイエス様が語られた言葉の通り、神様はイエス様を死より甦らせました。この事実こそ、神様が私たちを復活させ、神の国へと導く約束の確証なのです。祈りましょう。

2021年1月12日（火）

立川教会牧師飯島 信